様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０５４５

研究課題名（和文）ヨーロッパ東洋学における日本語論に関する日本語学史的研究

研究課題名（英文）A historical study on Japanese linguistics in European oriental studies

研究代表者
山東　功（Santo, Isao）

大阪府立大学・高等教育推進機構・教授

研究者番号：１０３２６２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀初頭に成立したヨーロッパ東洋学において、特にフィッセルやシーボルトが招来した日本関係文物の影響や、そこから当時のオリエンタリズム的思考と植民地主義的言語観と日本語との関係や、比較歴史言語学研究にヨーロッパ東洋学（特に日本学）が果たした役割について、言語思想史的知見を加えながら、学説史的に検討を試みた。具体的には、ホフマンやアストンなどと比して、これまで日本語学史的にほとんど言及されることのなかったレオン・ド・ロニーやアウグスト・プフィッツマイヤーらの日本語研究などを中心として、ヨーロッパ東洋学における日本語論を日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を行なった。

研究成果の概要（英文）：In this study, in European oriental studies established in the early 19th century, especially the influence of Japanese religious civilizations brought in by Physel and Siebold, and the relationship between orientalistic thinking and then colonialistic linguistic view at that time and Japanese, it was attempted to examine the role of European oriental studies (especially Japanology) in comparative historical linguistics while historical knowledge of language thought.

研究分野：日本語学史

キーワード：ヨーロッパ東洋学　日本語学史　ロニー　プフィッツマイヤー

１．研究開始当初の背景

国語学の祖とも言うべき国語学者の上田万年は、ヨーロッパ留学前の 1890（明治 23）年に書かれた論文「欧米人の日本言語学に対する事跡の一二」(『国語のため　第二』所収）の中で、欧米人の日本語研究について紹介し、これを博言学に依拠する学派として「科学派」と名付けた。一方、国学の言語研究の流れを汲むものは「古学派」として捉えられ、両者を対比的している。日本の近代化にとって欧米の学術移入は不可欠であると認識されていた当時としては、外国人の日本語研究についても、当然のことながら十分に参照すべき対象であった。

ところが、外国人による日本語研究については、こうした明治期におけるいくつかの言及を除いて、それほど研究が進まなくなった。少なくとも国語学史という分野では、本格的に言及されることが少なくなったと言える。大きくは資料閲覧の困難さや、外国語で書かれているという、言語の問題が存在したためだが、それと共に、日本人による日本語に対する自覚と反省とは繋がらなかったという、研究のあり方も関係していたからという点も指摘できよう。極言すれば、言語研究上の観点のみならず、政治・社会的にも日本における言語研究の優位性を十分示し得ることができるようになったからである。特に国語学史の分野では、近世国学の言語研究に関して、極めて多くの研究がなされるようになった。つまりは、明治以降の国語学成立以前の言語研究がどのようなものであったのかという、いわば学知に対する自覚と反省、正確にはその顕彰の結果であると言える。こうした研究成果から、言語研究のあり方に至るまでの思弁を行い、一つの言語観を打ち立てたのが時枝誠記である。時枝の国語学は国語学史研究から出発している。時枝の『国語学史』では近世国語学の言語研究が極めて高く評価される一方、外国人の日本語研究についてほとんど言及されない。その意味で、国語学史と外国人の日本語研究とは直接相容れないものといった様相を呈している。

そこで、少なくとも国語学史上、極めて興味深いジャンルでありながら、あまり言及されなかった、外国人（中でも西洋人）による日本語研究について、言語研究の分野から精査するといった、本格的な検討が必要であると思われる。それは、日本語への視点を考える上で、極めて相対的な視座を提供するとともに、そのような視点の持つ意味そのものを、考えさせることにもなるからである。本研究では、外国人の日本語研究を含むことによって、「国語学史」は「日本語学史」として定置できると考えているが、そうであるならば、重要なのは単なる名称の違いとは異なる「日本語学史」というあり方そのものを吟味することにある。

日本語学史が「日本語学」の「歴史」であるならば、その「日本語学」は、やはり地域や民族からは自由であるべきという立場も存在する。このことをふまえて歴史を記述するには、どうしても「日本」という地理的な境界を超えた広がりが必要であるし、異なった視点を持った日本語研究についても、相応の言及が不可欠である。仮に、日本人による日本語研究が〈内〉の視点によるものだとすれば、外国人の日本語研究とは〈外〉の視点によるものだと言える。

２．研究の目的

日本語研究の歴史的伝統と、その成果の正確な継承は、研究者個人の問題を超えた歴史的使命として考えられる。しかし今日散見される、最初に結論ありきの評論的言語論では、結局は実証的研究を無視している以上、議論の説得性に欠けるきらいがある。例えばパジェスに関しては『日仏辞書』の名がよく挙がるものの、それは語史研究においてのみの評価であり、他の日本学者の言語研究とはいかなる関係にあったのかについては、意外なほど詳らかになっていない。ましてやロニーやプフィッツマイヤーなどに至っては、その人物名のみが独り歩きして、十分実証的に言及されているとは言い難い現状である。また、国内の文献所蔵機関においても、シーボルトやホフマンについてはおおよその整理がなされているものの、他の研究者については十分な整理があまりなされておらず、おそらくは把握できる範囲でも百数十篇は存在する日本語論関係著述の全貌に関する言語研究史的解明は必須であると思われる。

その上、東洋学者の著述については、ようやく一部が全集等により復刻されつつあるものの、それでも言語研究の全体像からすれば極めて僅かであり、緊急性は絶対である。本研究は、こうした喫緊性の問題をふまえつつ、主要な著述に関する文献調査を行うとともに、その具体的な実態を広く日本語学史の観点から全体を定置するという、いわば言語思想史的方法論によって考察しようとするものである。さらに具体的な文献については、関係機関との連絡や許諾をとりながらデータ化することで、研究史料としての利用簡便性への配慮を試みる。

本研究はヨーロッパ東洋学者の著述に関する文献学的実証研究と、東洋学・日本学の実相という文化交流史、対外交渉史的研究とを、近代国語学成立という言語思想史的見地から統合する、極めて学際的かつインターフェイスな日本語学史的研究と位置付けられる。こうした、西洋と日本との関係に注目した日本語学史の本格的な研究は、今後必須不可欠者であると考えられる。

さらに、本研究は従来の「今日の日本語研究に資する」研究のみを重視する日本語学史研究に対し、極めて実証的な文献学的検討を加えることで、日本語研究と西洋におけるオ

リエンタリズム的思想との関係を、極めて精緻に位置付けることができるものである。このことは、一方的な実用的立論に陥りがちであった研究史を、より浩瀚な研究分野として再構成し得るものとなり得よう。しかも、言語思想史的背景を重視するという日本語学史的方法論を採用することにより、言語学的にも、偏りのない穏当な記述が期待できる。こうした学説史研究は、今日における日本語研究に対する自覚的な反省と、今後への展望を与えるものである。また、国際的にも言語思想史的研究学会として著名な、英国ヘンリー・スウィート学会の存在にも見られるように、日本語研究の分野においても、ますます重要性を帯びてくるものと思われる。

３．研究の方法

具体的な研究としては、1822 年のエジプト学成立以来、ヨーロッパにおいて本格的な東洋学が相次いで成立し、中国研究の分野ではフランスのアベル・レミュザ、ユリウス・クラプロートらが活躍した時代から、シーボルトやフィッセルらによって本格的な日本紹介がなされ、ケンペルやツンベルクらの段階とは異なる、より精緻な「学」としての日本研究がなされるようになった時期の日本語論についての検討を試みる。ヨーロッパでの東洋学の成立は、1814 年にレミュザがコレージュ・ド・フランスの中国及韃靼満州語言文学講座教授就任に始まるが、1823 年にはパリでアジア協会（'Société Asiatique'）が創立され、学会誌も発刊されるようになる。こうしたことが契機となり、東洋の一部である日本もその研究対象となり、ひいては「日本学」としての研究領域を形成するに至ったが、そうした経緯は日本語学史においてほとんど言及されることがない。シーボルトの帰国と東洋学研究の下地がうまく重なり合う中で「日本学」は成立していったにも関わらず、その意義も、現在においてもほとんど示されていないと言える。

また、ヨーロッパにおける東洋研究は当初、啓蒙主義時代の精神を反映して、極めて理想的な姿で語られることが多いが、18 世紀になると逆に停滞論が盛んになり、例えば中国に対する見方では、専制国家で前近代的であるなどといった批判が多くなる。こうした流れを受けて、19 世紀の東洋学は、いわば実証的な研究手法を重視した学として、その存在意義を高めることになった。帝国主義的、植民地主義的思想からは免れていないにせよ、実際の見聞や豊富な資料をもとにした分析は、自ずと所論も精緻であり、その研究史的意義は極めて大きいものと言える。

なお、本研究の実施にあたっては、すでに新村出、亀田次郎、吉町義雄、松村明各氏等によって言及された研究成果や、富田仁編『事典外国人の見た日本』といった事典の掲載書目一覧を駆使することにより、作業の効率化を図るとともに、それらの成果に少なからず存在する誤った記述の訂正に対する補訂作業を、本研究に先行して実施している（2013 年に単著を刊行）。

４．研究成果

2014 年度においては、フランス東洋学における日本語論に関する文献学的史料調査として、19 世紀ヨーロッパにおいて最も精力的な活動を行い、多くの言語学的著述を残したクラプロート、レミュザ、ランドレスといったフランス東洋学者の伝統的系譜について、レオン・パジェスやレオン・ド・ロニーらの日本語論の精査を通して、時系列的に分析を行った。具体的には、今日ではほとんど省みられることのなくなった東洋文明論的言語観や比較歴史言語学的日本語論の系統的分類を行うべく、ロニーの著述目録を作成するとともに、フランス国立図書館（Bibliotheque Nationale de France Fr.Mitterrand）所蔵文献の調査を行った。

2015 年度においては、ホフマンやアストンなどと比して、これまで日本語学史的にほとんど言及されることのなかったアウグスト・プフィッツマイヤーの日本語研究などを中心として、ヨーロッパ東洋学における日本語論を日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を試みた。具体的には、プフィッツマイヤー編纂の日本語辞書"Worterbuch der Japanischen Sprache"について、見出し語 1046 語をデータ化し、その範となった辞書類についての検討を行った。おそらくはシーボルト経由による『書言字考節用集』である可能性が極めて高いが、他のものも参照したと考えられるため、この点については継続して考察を行うこととした。

2016 年度においては、吉町義雄氏の研究（『北狄和語考』等）を除いて、ほとんど顧みられることのなかった、ティチング（Isaac Titsingh）の日本語研究の実態や、フィッセル（Johan Frederik van Overmeer Fisscher）の著述"Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk"（1833）の記述について、当時の対訳となる山路諧孝監修、杉田成卿、箕作阮甫、竹内玄同、高須松亭、宇田川興斎、品川梅次郎、分担訳の『日本風俗備考』の妥当性について検討を行った。シーボルト以前のオランダ商館員による日本語研究については、著述量の少なさ等も影響して、それほど高い評価が得られていないが、実際には、アベル・レミューザやユリウス・クラプロートらの研究によって成立した東洋学に対して、多くの影響を与えていたもの（例えばレミューザ翻訳による" Memoires et anecdotes sur la dynastie regnante des Djogouns, souverains du Japon"等の日本史記述や、クラプロートの"Asia polyglotta"との関係）と考えられる。また、フィッセルの『日本風俗備考』に関して、日本語会話の章に見られ

る長崎方言の記述が、現在の研究成果から見ても、おおよその妥当性をもっている点についても確認できた。
　2017 年度（最終）においては、前年度までに収集、整理された一次資料をもとに、当時のオリエンタリズム的思考と植民地主義的言語観と日本語との関係や、比較歴史言語学研究にヨーロッパ東洋学（特に日本学）が果たした役割について、言語思想史的知見を加えながら、学説史的に検討を試みた。具体的には、オーストリアのアウグスト・プフィッツマイヤーや、ドイツのルドルフ・ランゲ、ヘルマン・プラウトら東洋学（日本学）者の言説が、オランダの日本語学者であるヨーゼフ・ホフマンをはじめ後世に与えた影響や反目、さらには明治以降における教育機関での扱い方等について、従来の日本語研究史の枠組みにとらわれない形によって分析を
行なった。特に、ヨーロッパ東洋学におけるオリエンタリズム的思考は、印欧語比較歴史言語学研究のもと、東洋諸語一般に対して向けられており、日本語については、文字に関してその影響が顕著であることが窺えた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 山東　功、「言語生活」小考、2015、大阪府立大学『言語文化学研究（日本語日本文学編）』10、p.p.9-24、査読無

②山東　功、国語学史と言語思想史、2015、『日本思想史学』47（日本思想史学会）、p.p.37-47、査読有

③山東　功、近代国語辞書と文法―『官版語彙』をめぐって―、2017、『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室）85-3、p.p.1-17、査読有

④山東　功、国語国字問題の議論、2017、『日本語学』（明治書院）36-12、p.p.60-68、査読無

〔学会発表〕（計３件）

山東　功、近代国語辞書と文法―『官版　語彙』をめぐって―、2015、阪大日本語学研究会（大阪大学）

山東　功、国語学と有職故実―国学から国語学への展開をめぐって―、2017、龍谷大学仏教文化研究所 2016 年度第 19 回研究談話会（龍谷大学大宮キャンパス）

山東　功、近代文法用語の成立と学校国文法、2017、日本語文法学会（筑波大学）

〔図書〕（計１件）

山東　功、「近代国民国家の形成と戦前の言語計画」、共著、2015、高田博行・渋谷勝己・家入葉子編（執筆者 11 名）、『シリーズ・言語学フロンティア 04　歴史社会言語学入門 社会から読み解くことばの移り変わり』、大修館書店、総頁 243p、p.p.159-176

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織

(1)研究代表者
山東　功（SANTO Isao）
大阪府立大学・高等教育推進機構・教授
研究者番号：10326241